

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：10107

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10532

研究課題名（和文）アクションリサーチによる保健師のアセスメント能力向上を導く看護過程の構築

研究課題名（英文）Construction of a nursing process leading to improvement of assessment capacity of public health nurses by action research

研究代表者

塩川 幸子（Shiokawa, Sachiko）

旭川医科大学・医学部・准教授

研究者番号：80723379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アクションリサーチによる保健師の個別支援におけるアセスメント能力向上を導く看護過程の構築である。フィールドとして都道府県型の3保健所に研究協力を得た。介入は現場と研究者が協働で人材育成研修を企画運営し、3保健所で研修計10回、事例検討23件を実施した。保健師の看護過程の課題として、情報収集の範囲が幅広く枠組みが曖昧、家族全体を捉える地域生活の多様性、現在にフォーカスする傾向等が明らかになった。これらをふまえ、地域で暮らす人々の健康と生活、家族、時間軸の視点を関連させる包括的アセスメントの視点を事例検討に反映した。事例検討の分析から、母子と高齢者のアセスメントの視点を可視化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は保健師の個別支援におけるアセスメントの課題分析を通して、事例検討を軸とした研修企画を行った。現場への介入では、研究者が保健師の家庭訪問の特性、家族看護、看護過程などの講義を行い、強化すべきアセスメントの視点を共有した。さらに、事例検討は新任期だけでなく、プリセプター、管理期保健師も共に参加する構成とするなど幅広い経験年数の保健師が参加することで思考が活性化しアセスメントが引き出されることが確認できた。地域の人々の生活は複雑多様化しており、包括的アセスメントを促す研修企画は、基礎教育と現任教育の双方で活用可能であり、保健師の個別支援能力向上に貢献し、質の高い支援の実現に寄与すると考える。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to develop a nursing process that enhances the assessment skills of public health nurses in individual support through action research. Research collaboration was obtained from three prefectural health centers as the field. The field and researchers collaborated in planning and managing human resource development training, and 10 training sessions and 23 case studies were conducted at the three health centers. The issues in the nursing process for public health nurses were elucidated as follows: the scope of information collection is broad and the framework is ambiguous, the diversity of community life that captures the entire family, and the tendency to focus on the present. The case study planning reflected a comprehensive assessment perspective that relates the health, life, family, and time-based perspectives of people living in the community. From the analysis, we visualized the assessment perspectives of mothers, children, and the elderly.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：保健師 家庭訪問 看護過程 アセスメント 事例検討 現任教育 アクションリサーチ

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の背景

保健師の個別支援における看護過程の特徴は明らかにされていない。看護過程は、対人的援助関係の過程を基盤として、看護の目標を達成するための科学的な問題解決法を応用した思考過程の道筋である(日本看護科学学会 2011)。そして、基礎看護をはじめとし成人、母性、小児、在宅など領域毎にその専門性が打ち出されている。地域で生活する人々への個別支援として、訪問を手段に展開する在宅看護過程(正野 2014)は示されているが、保健師に特化したものは見られない。現場では、家庭訪問に自信のなさを感じている新人・中堅保健師の増加が報告されている(近藤 2007)。保健師活動領域調査における常勤行政保健師の家庭訪問稼働割合は2010年8.2%、2015年7.8%と減少傾向にあり、個別支援の看護過程を踏む機会は減少している。さらに、地域における支援困難事例は増加していることから、対象者のニーズをつかみ支援を展開していくことは難しくなっている。

現任教育においては、日本看護協会の実践力UP事例検討会の手法等を用い、アセスメント能力の向上を目指した取り組みが進められている。しかし、健康を切り口に家庭訪問を通して家族や生活を見るという思考プロセスや技術には掴みにくい側面がある。

保健師の看護過程は未だ理論化したものがみられないことから、事例検討会を通して看護過程をふみ、言語化し合う中でその専門性を実践知として明らかにする意義は大きい。

### (2) 問題の所在

保健師の個別支援における看護過程は理論化されたものがみられない。

家庭訪問件数が減少する中、新人・中堅保健師は訪問に対する自信のなさを抱いている。

アセスメント能力向上に向けて事例検討が有効とされているが、地域で生活している人々の支援について、事例検討で何を深めていくか明確にされていない。

保健師の個別支援における看護過程の教え方について可視化することへのニーズは高い。

## 2. 研究の目的

本研究は、事例検討会への参加型アクションリサーチを通して、アセスメント能力の向上を導く保健師の看護過程を構築することを目的とする。

(1) 保健師の個別支援における看護過程の課題について明らかにする。

(2) 保健師学生が看護師と保健師を対比して、看護過程をどのように捉えているか明らかにする。

(3) 研修企画担当保健師が考える保健師の個別支援における課題認識と企画意図を明らかにする。

(4) 事例検討へのアクションリサーチを通して、検討場面の分析を行い、保健師らしいアセスメントの視点を抽出する。

(5) 個別支援能力育成のための研修企画運営のプロセスを記述し、研修の目的と方法を可視化することで、研修企画のあり方への示唆を得る。

## 3. 研究の方法

機縁法により現任教育研修で個別支援に力を入れている保健所に研究説明を行い、承諾の得られた3保健所をアクションリサーチのフィールドとした。各保健所の管内で働く市町村および保健所保健師を対象とした研修について、研修企画担当保健師と研究者が共同で企画運営を行った。なお、3保健所をそれぞれ記述する際はA、B、Cで示す。

予備調査から課題を分析し、事例検討会への参加型アクションリサーチの計画と介入プロセスを立案した。

### (1) 予備調査

アクションリサーチのフィールドとなった3保健所の研修企画担当保健師6名に課題認識についてインタビューを行い、その結果を研修企画に反映した。

3保健所の初回研修に参加した新任・中堅前期の保健師を対象として、看護過程の課題についてフォーカスグループインタビュー(以下、FGI)を行った。

保健師学生の看護過程に対する認識について、レポート分析から実態を明らかにした。

### (2) 無記名自記式質問紙調査

3保健所で開催した研修において、研修参加者を対象に調査票を配付し、訪問記録からみた看護過程の実践状況と看護過程に対する意識についてベースラインと変化を把握した。

### (3) 事例検討会への参加型アクションリサーチ

#### 研修企画担当保健師との企画会議

現場と研究者が協働で人材育成研修の企画を行った。保健所ごとに、保健所管内の保健師の個別支援における課題分析を行い、研修の目的・目標の設定、方法と内容を検討した。なお、研修のねらいも考慮して参集範囲を決定した。

#### 研修会の開催

3保健所で計10回の研修を開催し、研修の中で事例検討を行った。研究者は全ての集合研修に参加し、講義を担当するとともに事例検討のスーパーバイズを行った。

#### 事例検討会後のFGI

個別支援のアセスメントで困難に感じていることが、事例検討会を通して変化したか、家庭訪問で看護過程を意識したアセスメントを行ったか、保健師のアセスメントの視点で大切と思うこと、他事例の支援に応用できたか等を把握した。

#### (4) 基礎教育・現任教育の双方で活用可能な指導手引の作成

事例検討会の場面分析を通して、保健師が地域でよく出逢う事例として、母子と高齢者の2領域についてアセスメントの視点を可視化した。

### 4. 研究成果

#### (1) 保健師の個別支援における看護過程の課題

2018～2019年度に都道府県型保健所の研修企画担当保健師6名を対象としたインタビューを実施した。対象者の保健師経験年数は平均20.5±5.4年であった。

逐後録を質的記述的に分析し、課題認識7カテゴリ、企画意図8カテゴリを生成した。

企画者の課題認識として、保健師は【援助点を見極めるための情報が取り切れない】、【真のニーズに辿り着くアセスメントが難しい】等と捉え、指導者が【後輩の育成の仕方に関心を持っていない】状況や【個別支援の経験を積み重ねにくい環境】を捉えていた。

研修の企画意図は、研修参加者が【保健師として個別支援力の自己評価を行う】ことで【看護過程に基づくアセスメント力の向上を目指す】等の目標につなげ【個別支援力の実態を反映した企画を練る】ことをしていた。さらに、【事例検討を工夫して多くの気づきを引き出す】ことで【支援を皆で振り返り判断を再考する】、【キャリアを超えた相互学習が訪問を後押しする】等と考えていた。

予備調査として3保健所で初回介入時に行ったFGIで課題を把握した。FGIには、新任期・中堅前期保健師27名が参加した。1グループ3～5人で、時間は30～40分とした。分析方法は、安梅(2010)によるFGIの複合分析を参考とした。逐後録から看護過程の課題に焦点を当てデータ抽出、地区ごとにコードを生成して意味内容の類似性からサブカテゴリを生成し、3地区を比較しながらカテゴリを生成した。その結果、アセスメントでは【地域での生活のイメージを広げられない】、【地域で暮らす家族の力を見極められない】、【判断の根拠となる情報が取れない】、【保健師自身が持つ価値観に当てはめて考えてしまう】、【一つひとつの情報をアセスメントし全体の統合が難しい】、診断では【今だけにフォーカスし時間軸で看護問題を捉えられない】、【その場でアセスメントしきれずニーズを特定できない】課題が挙げられた。これらが、【ニーズが曖昧なまま試行錯誤し支援している】、【関係が途切れない介入の仕方への迷いがある】という真のニーズを捉えた支援を困難にし【支援の方向性への確信が持てない】評価の課題へと看護過程全体に影響を及ぼすことが示唆された。アセスメントと診断の課題が多く抽出され、家庭訪問場面でアセスメントしきれずニーズを特定できないことが課題の核心となっていた。

保健師基礎教育において学生が捉えた保健師の個別支援の看護過程の特徴を看護師と対比して明らかにすることを目的に、保健師学生11名のレポートを質的記述的に分析した。保健師の看護過程では、幅広く柔軟な情報収集の枠組み、人生に寄り添い地域での生活に即した支援を考え、QOLの評価と継続支援の判断を行うという特徴が見出された。

#### (2) 保健師の個別支援における看護過程の実態

研修における事例検討会参加者を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。訪問記録には保健師の看護過程の思考プロセスが反映されることから、記録に書く項目と頻度、難しさ等について実態を把握した。分析方法は、各項目の単純集計と、看護過程の意識は研修前後でWilcoxonの符号付順位検定を行った。結果として、参加者50名のうち45名から回答があった(回収率90.0%)。所属は保健所20名(42.5%)、市町村25名(53.2%)であった。保健師経験年数平均9.7年、看護師の職歴はあり22名(46.8%)、なし25名(53.2%)であった。訪問記録に「いつも書く」項目は、訪問目的37名(82.2%)、情報収集42名(93.3%)、アセスメント37名(82.2%)、支援内容40名(88.9%)であり、評価における看護目標の到達度は10名(22.7%)、今後の計画は32名(71.1%)であった。難しいことの上位は、情報整理14名(31.1%)、アセスメント14名(31.1%)であった。訪問記録の指導を受けた経験は、あり35名(74.5%)、なし8名(17.0%)であった。看護過程に対する意識の平均は10段階のうち研修前6.16、研修後7.53へと上昇し有意な関連が認められた( $p<0.01$ )。

これらのことから、訪問場面で捉えた事実としての情報と支援内容は記述しているが、今後の目標や計画の記述が少なく、評価が手薄であることが明らかになった。事例検討を通して、看護過程を意識することが、訪問場面でも意図的な情報収集・アセスメントにつながる可能性が示された。

#### (3) 事例検討へのアクションリサーチの評価

2018年度から2020年度において、3保健所で計10回の研修を開催した。研修の前には保健所研修企画担当保健師と研究者で打合せと評価を行った。研修の企画運営プロセスについて記述することで、個別支援能力育成のための研修企画の視点を明らかにした。

なお、研修参加者は保健師延153名で、1人平均2.4回の参加であった。事例検討は延23件行った。事例検討の場面分析からアセスメントの視点を可視化した。

##### A 保健所

A保健所では、2018年度～2019年度に集合研修4回、市町村に出向いた研修1回を行った。参加者は27名で、保健所7名(25.9%)、市町村20名(74.1%)であった。保健師経験年数別では新任期11名(40.8%)、プリセプター7名(25.9%)、管理期9名(33.3%)であった。

研修企画担当保健師3名の課題認識は、新任期保健師は保健師の役割イメージに曖昧さが

あり、視点が家族全体に広がりづらく、家庭訪問の限られた場面の中で深い情報収集や情報を関連させた判断が難しいと捉えていた。組織の課題には、家庭訪問の減少傾向から個別支援の積み重ねの難しさ、事例管理体制が曖昧、業務多忙で振り返り時間確保の困難等が挙げられた。一方で、A保健所管内の強みとして、日頃から管内保健師が現任教育について相談しあえる関係性が構築されていた。

そこで、これらの課題や実態をふまえ、新任期保健師研修会に向けて、保健所研修企画担当保健師と研究者が共同でアセスメント力向上を目指した事例検討を企画運営した。事例検討の構成は、家庭訪問指導で振り返りの時間確保が難しいという組織課題も考慮し、新任期・プリセプター・管理期の保健師が事例検討に参加し、新任期のアセスメント力を見極めながら教育的関わりができる場を設定した。なお、事例検討の進め方は、事例紹介の後、保健師経験年数別グループワークで事例への質問を検討し、全体討議で質問を活用しながら事例の対象理解に必要な情報を整理し、アセスメントの視点等を共有した。新任期保健師と先輩保健師が参加する事例検討を通して、個別支援の看護過程をともにまわし学び合う成果がみられた。

さらに、検討した15事例のうち、母子事例6例と高齢者事例5例をそれぞれ領域別に集積して質問分析を行い、アセスメントの視点を可視化した。

#### **B 保健所**

2018年度と2019年度に中堅前期保健師を対象とした2回の研修場面に介入した。

B保健所研修企画担当保健師2名のインタビューを行った。研修企画に向けて、保健所管内の家庭訪問件数の推移などを月報や保健師活動計画書から読み取るとともに、市町村を巡回しリーダー保健師等との打合せを通して活動実態や人材育成体制が把握していた。さらに、保健師個人の課題と組織の傾向を分析した内容について研究者と共有し、研修企画につなげた。

研修参加者は、保健師経験年数3-9年目の中堅前期15名であった。研修参加回数は1回8名、2回7名であった。研修内容は、家族を捉える視点に特に課題がみられたことから、家族看護の講義を軸とし、家族の見方、生活の捉え方を解説した。事例選定は、子どもの成長発達をみながら、子育てを支援していくプロセスを検討することで、家族看護の視点も学ぶことができる母子事例2件とした。事例検討では、生活歴の異なる人同士が新たな家族を築き子育てしていく中で家族危機が発生した場合、どのように乗り越えていくのか、家族の力を見極め、子育てに伴走しながら支援していく保健師の役割についても検討することができた。

#### **C 保健所**

C保健所では、2018年度～2020年度に4回の研修を開催した。参加者は保健所保健師21名で1人平均2.2回であった。予備調査は研修企画担当保健師1名へのインタビューから、個別支援の課題は地域での生活、家族、時間軸の視点の弱さが挙げられた。研修企画担当保健師と研究者が課題からねらいを定め、介入計画を立案し、個別支援能力育成研修を実施した。

研究者が家族看護と家庭訪問の意義、事例管理、感情労働の講義を事例検討のテーマと連動しながら行った。事例検討は継続支援事例2例とし、1回目の検討内容を活かして支援し、半年後にモニタリングとして2回目の事例検討を行った。

参加者は個別支援に必要な情報収集項目を学び対象理解を深めたが、包括的アセスメントや継続支援の判断、自信のなさは課題に残された。さらに、支援者としての葛藤についての悩みから、対象者と保健師の価値観が異なる依存症事例への支援をテーマに事例検討を行い、感情労働の視点で支援を振り返り、関係性をベースとしたアセスメント力向上をねらった。

一連の介入の評価として、家族や生活、時間軸の見方の講義は、保健師の個別支援における情報収集項目の特徴をつかみ、家族の生活史をふまえた対象理解につながった。感情労働の視点での振り返りから、陰性感情を乗り越え対象者に向き合う姿勢がみられた。今後は、対象理解から一歩進み、ニーズの明確化と目標設定を重点とした事例検討の企画が必要と考える

### **(4) アクションリサーチのまとめ**

#### **保健師現任教育研修における企画の視点**

企画においては、課題分析が起点となるため、実態把握が欠かせない。研修企画担当保健師は、月報からみた稼働割合や家庭訪問件数等の分析を行うとともに市町村からの相談内容や管理者への聞き取り等をもとに現任教育の実態を把握していた。日頃から保健所管内で相談しあえる関係性が企画の土台となる。企画段階で、現場の課題を明らかにすることで、対象に合わせた研修につながる。

#### **アセスメント力向上を目指した研修企画**

企画の柱は、保健師の個別支援力の自己評価と企画者の課題認識をふまえた目標設定を行い、看護過程を軸として、多面的な情報収集と自身の価値観から脱却した包括的アセスメントおよび看護問題を特定していく思考プロセスの獲得に向けた事例検討であった。

事例検討の構成は、多様な事例から家族の生活ぶりを知り支援の展開がつかめるよう、健康と生活を関連させる思考を磨く問いかけを重視した。

職場環境や風土についても把握し、新任期保健師だけでなく、プリセプターや管理期保健師の参加を得た。キャリアを超えた相互学習の構成は、新任期にとってはアセスメントのヒントが得られ、プリセプターと管理期にとっては新任期の力量を把握し指導のポイントを学ぶ機会となり、皆で育ちあう現任教育研修の有効性が示された。

### アクションリサーチの全体評価

研修企画のプロセスは課題分析から研修目標の設定、事例検討の構成や進め方へとつながっており、今後の研修企画の参考として図1に示す。

事例検討から可視化したアセスメントの視点として、母子を図2、高齢者を図3に示す。事例検討の分析から抽出した実践に基づくこれらの視点は、教育ツールの一つとして個別支援や事例検討の中で活用し、アセスメント力向上の効果検証とさらなる洗練をしていくことが今後の課題である。

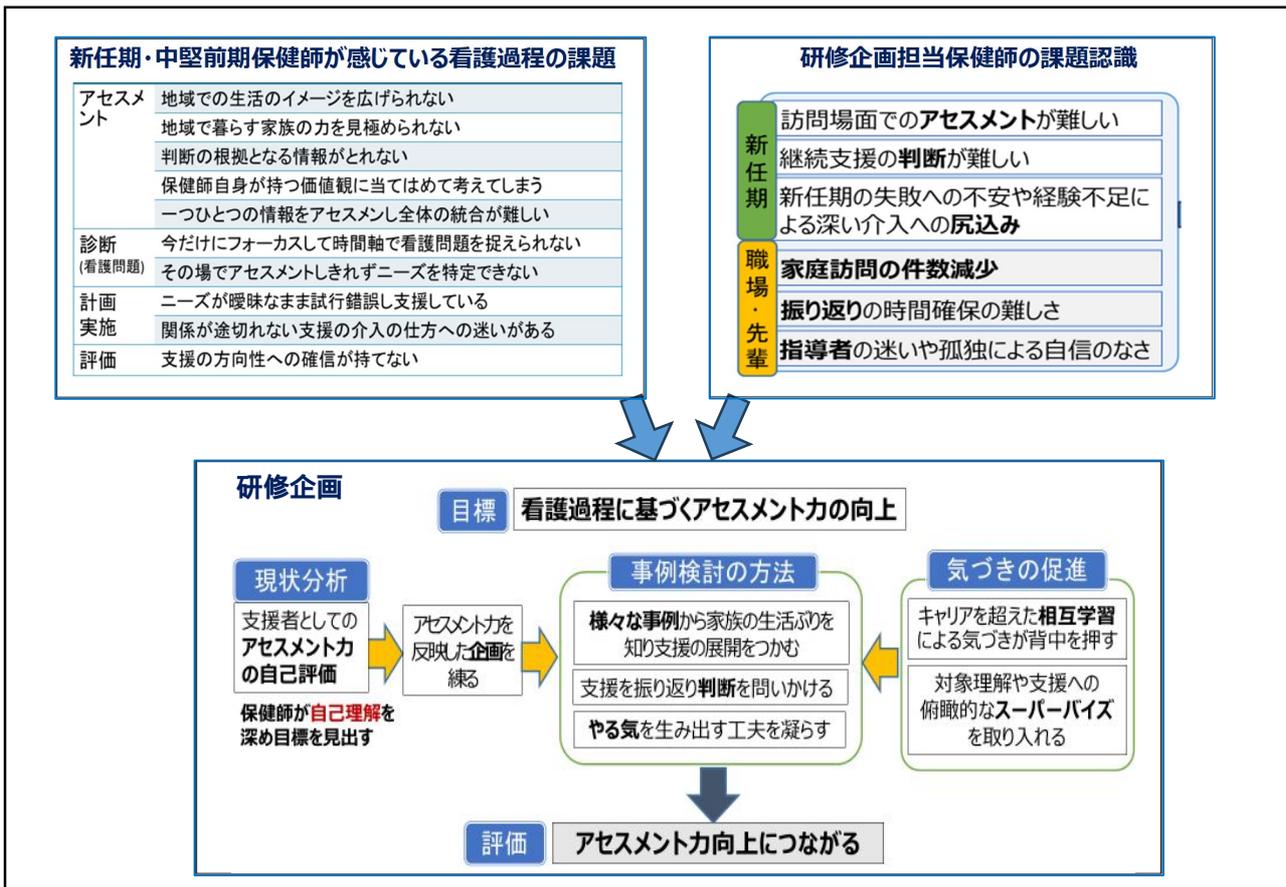


図1 事例検討の企画プロセス

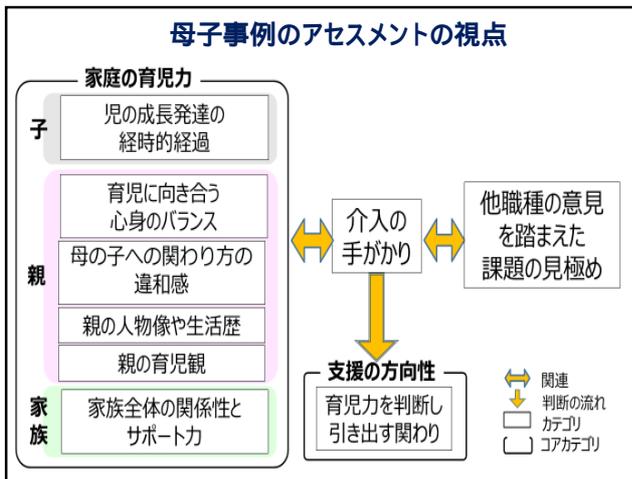


図2 母子事例のアセスメントの視点

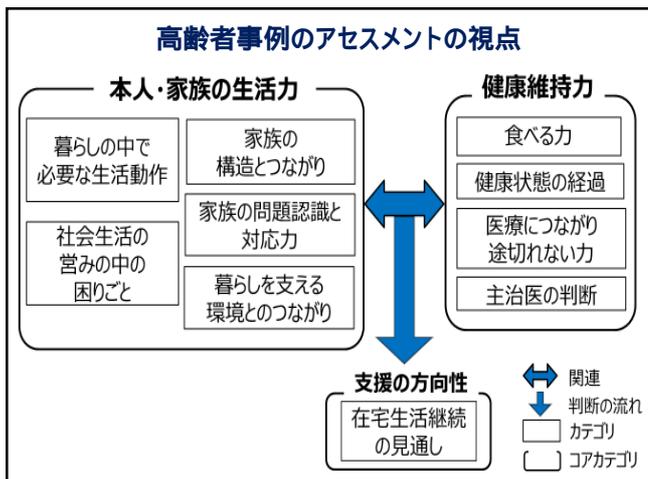


図3 高齢者事例のアセスメントの視点

### <引用文献>

日本看護科学学会看護学術用語検討委員会第9・10期委員会．看護学を構成する重要な用語集．公益社団法人日本看護科学学会、2013、7  
 正野逸子、本田彰子、関連図で理解する在宅看護過程、メヂカルフレンド社、東京、2015、14  
 近藤明代、大西章恵、羽原美奈子、他、行政保健師の家庭訪問に対する認識、日本地域看護学会誌、10(1)、2010、35-41

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 塩川幸子, 藤井智子, 神戸愛, 水口 和香子, 山下千絵子	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 事例検討の質問からみた高齢者のアセスメントの視点	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本公衆衛生看護学会誌	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15078/jjphn.13.1_22	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山下千絵子, 塩川幸子, 藤井智子	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 新任期保健師のアセスメント力向上を目指した事例検討における質問の特徴 母子の個別支援を通してー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20746/jachn.26.1_69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 塩川幸子, 山下千絵子, 神戸愛, 水口 和香子, 藤井智子	4. 巻 34
2. 論文標題 保健師学生が認識した保健師の看護過程の特徴 看護師と対比して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道公衆衛生学雑誌	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 塩川幸子, 藤井智子, 山下千絵子山下千絵子, 塩川幸子, 藤井智子	4. 巻 35(2)
2. 論文標題 保健師の個別支援における看護過程の課題 - アセスメント力向上を目指したアクションリサーチを通して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道公衆衛生学雑誌	6. 最初と最後の頁 133-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩川幸子, 山下千絵子, 藤井智子, 水口和香子, 神戸愛	4. 巻 37
2. 論文標題 個別支援アセスメント力向上を目指した保健師現任教育研修の企画 - 企画者の課題認識と企画意図 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道公衆衛生学雑誌	6. 最初と最後の頁 85-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山下千絵子, 塩川幸子, 藤井智子, 水口和香子, 神戸愛
2. 発表標題 アセスメント力向上を目指した保健師現任教育の研修企画 (第1報) - 研修企画担当者の個別支援能力育成における課題認識 -
3. 学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2022年 ~ 2023年

1. 発表者名 塩川幸子, 藤井智子, 山下千絵子, 水口和香子, 神戸愛
2. 発表標題 アセスメント力向上を目指した保健師現任教育の研修企画 (第2報) - アクションリサーチによる事例検討の企画意図 -
3. 学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2022年 ~ 2023年

1. 発表者名 塩川幸子, 藤井智子
2. 発表標題 アセスメント力向上を目指した事例検討 (第1報) - 管理期・プリセプター・新任期がともに育ち合う研修の企画評価 -
3. 学会等名 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山下千絵子, 塩川幸子, 藤井智子
2. 発表標題 アセスメント力向上を目指した事例検討(第2報) - アクションリサーチによる母子事例の質問分析を通して -
3. 学会等名 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井智子, 塩川幸子, 神戸愛, 水口和香子, 山下千絵子
2. 発表標題 アセスメント力向上のための事例検討(第3報) - アクションリサーチによる高齢者の質問分析を通して -
3. 学会等名 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塩川幸子, 藤井智子, 水口 和香子, 山下千絵子, 神戸愛
2. 発表標題 保健師学生が捉えた保健師の看護過程の特徴 看護師と対比して -
3. 学会等名 第72回北海道公衆衛生学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩川幸子, 藤井智子
2. 発表標題 保健師の個別支援アセスメント能力向上を目指した研修の企画評価 - アクションリサーチを通して -
3. 学会等名 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井智子, 塩川幸子, 山下千絵子
2. 発表標題 保健師の個別支援における看護過程の実態(第1報) - アンケート調査から -
3. 学会等名 第8回公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩川幸子, 藤井智子, 水口和香子
2. 発表標題 保健師の個別支援における看護過程の実態(第2報) - フォーカスグループインタビューを通して -
3. 学会等名 第8回公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤井 智子  (FUJII Tomoko)  (20374796)	旭川医科大学・医学部・教授   (10107)	
研究分担者	水口 和香子  (MIZUGUCHI Wakako)  (20781462)	旭川医科大学・医学部・助教   (10107)	
研究分担者	山下 千絵子  (YAMASHITA Chieko)  (30909312)	北海道科学大学・保健医療学部・助教   (30108)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	神戸 愛  (KOBE AI)  (20984488)	旭川市立大学・保健福祉学部・助教    (20107)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関